



アフリカ

No.115

NOW



アルジェリア南西部チンドウフ近郊の西サハラ難民キャンプに住む家族。甘くておいしいお茶を楽しむ 2019年12月 撮影：稲場 雅紀

CONTENTS



目次

特集：アフリカ日本協議会の25年とこれから

Special Topic: History of AJF's 25 years and our future

斉藤 龍一郎さんが語る：AJF の 2000年から2016年～人とつながる歩み

3-7

Interview with Saito Ryoichiro: AJF's 2000-2016 history of connecting with people

AJF25周年「これからアフリカの人々とできること～アフリカ日本協議会の歴史を振り返りながら」

What can we do with African people? Consideration on AJF's activities for 1994-2019

AJF の活動を振り返るⅠ(1994-1999年)、AJFの活動を振り返るⅡ(2000年代以降)

8-10

なぜ「アフリカの人々と何をしていくのか」を考えるのか

玉井 隆 11

身体健康や心の痛みをサポートするアフリカの仕組みに学ぶ

杉下 智彦 11-12

資源開発とエボラに対して先住民族とどう歩んでいくのか

西原 智昭 13

AJF2020 年度常設委員会の報告

Activity reports of AJF's four committees

14-15

西サハラ「グデーム・イジーク抗議キャンプ」を忘れない

箱山 富美子 16-17

Western Sahara "Remember Gdeim Izik Protest Camp"

解説：「29年ぶりの軍事衝突」が突きつける西サハラの現実

稲場 雅紀 17

AKC リレーエッセイ第8回

アフリカンキッズクラブ、アフリカンユースミートアップに出会えて

中田 茉莉 18

My encounter with African Kids Club and African Youth Meetup

アフリカンキッズクラブ東海について

エバデ・ダン 愛琳 19

「キモカワイイ」ショナ彫刻

'Kimo Kawaii' Shona sculpture

宮園 広幸 20

書評：玉井隆『治療を渡り歩く人びと』

小森谷 祐司 21

AJF のインターン・ボランティア紹介 vol.1

Introducing AJF's interns and volunteers

22-23

AJF 事務局から読者の皆さんへ～ひとつの結び目として／活動日誌

裏表紙

齊藤 龍一郎さんが語る

AJF の2000年から2016年 人とつながる歩み

Interview with Saito Ryoichiro

AJF's 2000-2016 history of connecting with people

「アフリカはすごいな」という存在

— アフリカに興味を持ったきっかけ、AJF との出会いについて教えてください。

アフリカへの興味のきっかけの一つは、1990年に開催された「アパルトヘイト否！国際美術展」。その下町展をやって津山さんに来てもらって学習会も行った。アフリカに関連する情報を集めたりしていた。もう一つは、当時勤めていた解放書店の同僚に教えてもらったアフリカ文学。グギ・ワ・ジオンゴ (Ngũgĩ wa Thiong'o) の作品を知って、すごいなと思った。その同僚に「下町展で終わりじゃない。スワヒリ語やるんだろ」と言われて、二人で10年近くかけ、タンザニアでベストセラーになっていたユーフレイズ・ケズラハビ (Euphrase Kezilahabi) の小説をスワヒリ語で読んだ。だから僕はアフリカを救済の対象と思ったことなんてなかった。「すごいな」という存在だった。

AJF につながる出会いは、1993年のアフリカ開発会議 (TICAD I) に向けた NGO の国際シンポジウムの準備会合に行ったとき。その後、1994年に AJF が設立され、会員になった。AJF でインパクトを受けたのは、本人たちに語らせること。日本人が代弁したり、こうしてあげたらいいとお膳立てしたりするのではなく、アフリカの本人たちが語るのが一貫している。そして言い放しにするのではなく、日本側からもさまざまな働きかけをしている点だった。

上野の AJF の事務所が職場から近かったので、帰りに寄ってみようと思った。職場は土曜も出勤で月曜日が休みだったので、AJF に顔を出して発送作業やイベント案内の作成などの事務方作業を手伝った。

AJF の活動をなんとか後につなぎたい

— 事務局長を引き受けられて、どんなことに気を配られましたか。

2000年にそれまで中心になって活動していた運営委員や幹事が辞めてしまった。そのとき僕はまだ解放書店の仕事をやっていて、休日の月曜日にボランティアで事務方の仕事を手伝う程度だったから、残っていたスタッフがやるのが妥当だと思っていた。ところが、その人は引き受けないというし、初代事務局長の尾関葉子さんからメールが来て「事務局長やらないの」と言われてしまった。ご指名だったので、しょうがないな、と引き受けた。僕はとにかく国際協力のイメージもないし、人とのつながりもないので、何を考えたらいいのかもよくわからなかった。でも、会員がそこそこいて、本人たちの声を伝える活動をしている団体は大事だから、何とか後につなぎたい、という思いがあった。当時はいくつかのワーキンググループが総会で事業を承認してもらい、それぞれが独自に予算を立てて活動していた。組織形態としては普通じゃない。会員が集まってやるというのは大いに結構だけど……。じゃ事務局では何をやるのかって考えて、会員に情報提供をしようということでメーリングリスト 'ajf-info' を立ち上げた。ほかに事務局が関与したのはスタディツアー。当時 AJF のスタディツアーは敷居が高くて、セネガルのダカール空港集合というように現地集合だった。スタディツアーに行った人たちは独自に立派な報告書を出していた。

あとは団体だから会報をきちんと出す、そして会費をきちんと集める、この二つは事務方仕事の一番の基



さいとう りょういちろう：1955年生まれ。東京大学教育学部行政学科卒業。1984年から2004年まで解放書店に勤務。2000年から2016年まで AJF の事務局長を務める。立命館大学生存学研究所運営委員（2013年4月～2021年3月）。障害学会理事（2011年10月～2017年9月）。AJF 理事（2000年4月～）。人の家に行くのが好き。家族と違う人のつながりがひろがっていかないかなーと夢想する。やりたいことは読書。

本だと思った。そういうことがやりやすいよう、名簿の整理や発送作業のデータベース作成など環境を整えた。こういうことは職場でやっていたので、問題なくできた。この頃、解放書店で仕事を19時ぐらいまでやって、自転車です15分かけて AJF に行き、日付が変わるまで作業するという毎日。夜来てやれることは限られていて 2002 年までは事務局を回すので精一杯だった。

2001 年に当時の森喜朗首相が歴代総理大臣で初めてアフリカを訪問して、2003 年に東京で TICAD III を開催することを明らかにした。そこへ向けて何かやらなければということで、感染症研究会と食料安全保障研究会の二つの研究会を立ち上げることになった。また、2001 年秋に開かれた TICAD 閣僚会議に、主催者がアフリカから市民社会メンバー 3 人を呼ぶことを決め、AJF もアレンジすることになり、その準備にも追われた。

2004 年には AJF を NPO 法人化した。この年、解放書店は職員を 3 人も抱えると赤字になることが現実になった。だったら AJF の活動もあることだし、一番長い僕が辞めようと思って、AJF の専従になった。昼間も作業できるようになり、LAN を組んで、複数の人間でデータやプリンタを共有できるようにした。ADSL になると通信費が半分になったね。専従になって時間ができたけど、給料はそりゃまあ下がるよね。でも、不安なんか感じなかった。感じなかったから長くやっていたんだらうね（笑）。いろんなことが動き出してやりがいもあった。

僕は解放書店や AJF での仕事のほかに、脳性麻痺者の泊まり介助を続けていた。病気でお腹を切った二度目の 2013 年の夏まで 30 年間続けていて、介助先のおじさんから制度の枠を使うことにしたから「もう来なくていい」と言われたので辞めた。介助を続けていたのは、ある種のくされ縁みたいな介助者仲間がいたことが大きい。僕が一番年かさ。その下は 10 歳くらい年下の人までいた。彼らの顔を見ると途中でけげんわけにもいかないな、と思っていた。僕は昔冷たい人間、人のことに関心をもっていないと言われたことがあった。変わったのは大学で運動を始めたのが大きかった。障害児の普通学級就学運動に加わって、人の家に行ったのが大きい。僕らの頃の運動は、同じ釜の飯を食ったり、汚い部屋でゴロゴロしながらガリ版印刷の作業をしたりしていた。そういう環境の中で人とのつながりが見える。子どもの就学運動だけだと親が動くから、家のことはどうするの？となって、親の代わりになる兄ちゃんや姉ちゃんが出入りして、子どもにラーメンやひきわり納豆を作って食べさせる。そういう仲間の中にいると否応なく人が迫ってくる。その時に付き合い始めた人間が今もつながっている。

当事者とつながる AJF の人権アプローチ

—2001 年に立ち上がった、二つの研究会について教えてください。

AJF として課題に継続的に向き合い活動するということで、林達雄さんが中心になった感染症研究会と、吉田昌夫さんが中心の食料安全保障研究会が立ち上がった。当時僕は感染症研究会を担当し、幹事の河内伸介さんが食料の方を担当していた。林さんは、1990 年代後半に大きな手術をした後に療養を兼ねてタイに行き、2000 年～2001 年にはケニアと南アフリカへ行って HIV 陽性者運動とつながりを作って帰ってきた。林さんがタイにいた頃、HIV 陽性者運動が立ち上がり、タイ政府が製薬会社にジェネリック薬を作らせるなど、いろんなものを動かしていた。彼らの姿に触れて、林さんは元気を取り戻し、日本に戻って、1999 年の沖縄感染症国際会議で何か言うべきだと、いくつかの NGO に働きかけ連名で意見書を出した。その後、南アフリカのダーバンで開かれた国際エイズ会議に参加し、アフリカの HIV 陽性者運動の高まりを強く感じた。僕は当時、あまり HIV/AIDS についてイメージがなかったが、調べると製薬会社が特許裁判を起こしたりする一方で、治療への権利が重要な問題であることがわかった。アフリカのエイズに関する情報が医療など特定分野に集中していて HIV 陽性者たちの声が伝わってこないというので、海外の関連するニュースを日本語にしてメーリングリストで流し、資料集を作った。当時ニューヨークにいた吉田智子さんがいろいろな情報をくれたので、その中から選んでマニラにいた原田洋子さんがわかりやすく翻訳してくれた。

2002 年になって、感染症研究会に参加していた稲場雅紀さんから、仕事を探してますとメールが回ってきた。そこで、まずナイジェリアの調査へ行ってもらい、外務省 NGO 活動環境整備事業 NGO 研究会の受託が決まったところで事務局に入ってもらった。稲場さんに来てもらったことはラッキーだった。僕の最大の功績かもしれない（笑）。それまで HIV/AIDS は保健医療分野でという扱いだったが、稲場さんはそれを人権の問題としてとらえていた。1997 年に日本ではそれまでの予防・隔離を基本とする伝染病対策を見直し、感染症対策法ができた。名乗り出れば治療が受けられて生き延びることができる太陽政策。そのためにいい条件を勝ち取る、そんな取り組みや行政側の人権指針作りへの働きかけなどを通して、稲場さんは、感染症対策と人権に関する具体的なイメージを持っていた。しかも世界のエイズ・アクティビストたちとさまざまな形でつながっていた。

そうした経験を踏まえて、AJF が事務局を担った

2002年の外務省主催 NGO 研究会では、ケニアのアスンタ・ワグラ（Asunta Wagura）さんや南アフリカのフォロゴロ・ラモスワラ（Pholokgolo Ramothwala）さんと呼んで話をしてもらった。でも、そういった取り組みになじまない人もいて、もっと技術的なことや実践につながることをやってほしいとの声ももれ伝わった。でも、HIV 陽性者運動って本来実践的な話で、誰が実践するのかということ。本人たちが治療を求めて運動し、周りの人間がそれをサポートし環境づくりをする。林さんがケニアと南アフリカの HIV 陽性者運動とのつながりを作り、稲場さんが来たことが、AJF の感染症研究会が当事者運動に注目し、連帯を原則に据えて活動することにつながった。HIV/AIDS は国際保健の取り組みの形になり、外務省のホームページに研究会の成果はアップされている。

その頃は、国際協力機構（JICA）もエイズのことをやらないと、という風潮だったが、薬の問題が避けて通れなくて、HIV/AIDS 対策の一環として結核が直接の死因となることが多いので、結核対策に力を入れるという方針だったと聞いたことがある。ある AJF 会員の JICA スタッフとビールを飲んだときに「AJF は必要とするすべての人にエイズ治療をなんて絵空事を言っていると信頼を失うよ」と言われたことがあった。当時はダイナミックスが見えないような状況だったからそんな感覚だった。アフリカではエイズで毎日人が死んでいることばかりが報じられ、意識のギャップがあった。意識を向けるにも大前提になる情報がないと話にならないから、『エイズとアフリカ資料集』を第四集まで発行した。計300冊ほど売った。それを引き継ぐ形でグローバル・エイズ・アップデートの編集とメールマガジンでの配信が始まった。

HIV/AIDS の活動で一番印象に残ったことは、2002年にエイズで亡くなった国際協力の専門家の遺族から350万円の遺贈があったこと。会員を通じて AJF に話が来た。HIV 陽性者が治療にアクセスする権利という、他でやっていない活動に取り組んでいたから AJF に来たのだと思う。遺贈は人のつながり。その人は亡くないけれども、その思いがつながった。そして、「アフリカに関する情報がこうやって入ってくるのはいいな一」と思ってきてくれる人とか、「当事者がやるのはいいな一」というところで、AJF の存在意義があるかなと思うようになった。HIV/AIDS の取組みは、AJF の会員も含め、NGO や援助関係機関の関係者・研究者などもさまざまな形で貢献してくれた。

食料安全保障研究会の取り組み

第一期の2001～2003年の食料安全保障研究会は河内さんが中心になり、AJF でも提言書を出してウェブ

AJF 事務局長時代について語る齊藤龍一郎さん

2020年10月30日



サイトに掲載した。その後、2006年から第二期として、東京農大の稲泉博己さんに理事になってもらって、2010年ごろまで学習会を年に2、3回開催した。2008年に横浜で開かれる TICAD IV に向け、横浜市と国連食糧農業機関（FAO）、AJF の共催でアフリカの食と農のシンポジウムが開催された。この時は、明治学院大学の勝俣誠さんが司会をやった。シンポジウム後の交流会には、マトケフライや東京農大が作ったヤムイモ焼酎なんかも出された。また、スタッフからこれで終わりは残念という声が出てその後の「食べものの危機を考えるセミナー」や「世界食料デー」月間につながった。

「食べものの危機を考えるセミナー」は2016年まで継続し、「世界食料デー」月間はイベントとキャンペーン、交流イベント 'WORLD FOOD NIGHT' の開催など、現在も取り組みが続いている。AJF、FAO、ハンガー・フリー・ワールドは一貫してこの企画にかかわってきている。その後、冊子『アフリカの食料安全保障を考える』を出した。また、同じころに農水省から FAO に2年分の予算がついて、Alliance against hunger & Malnutrition の日本版をやろうということで立ち上がった「ゼロハンガーネットワーク」にも参加した。

食料に関わる僕自身の立脚点

アマルティア・セン（Amartya Sen）の本を2000年ごろに読んだのが大きかったね。あれはインパクトがあった。そこに食べ物があるからと言って誰もがアクセスできるわけではない、お金がないとだめということをエンタイルメント（entitlement）という概念で説明していた。あともう一つは、1993年にシアトルに行ったときに買った 'Current History' という雑誌に掲載されていた「善をなさんとして悪をなすのか」を読んだことだ。食料援助は諸刃の剣と書かれていた。食料援助がなされたら、耕作者は作る気がなく

なってしまう。作っても買ってもらえない。センを読むと飢餓対策の道は、飢餓が起こりそうな場所で公共工事をやって、お金を持たせることだと言っている。お金を持っている人のところに商人が食べものを持っていく。そういうサイクルを抜きにして食料援助をしているのはちょっと違うのではないか、というのがベースにある。

食のほかに農を巡る問題では、小農の権利宣言が出てくる。土地に応じた利用法が必要。機械的に同じ技術で大量生産をやるのでない。農ってというのはそういうのに適していない。アフリカで大豆の普及などやるのはちょっと違うんじゃないかな。アフリカでは多様な豆類が栽培されているのに、大豆が栄養によいからアフリカで作れというのは違うだろう。AJFの食料安全保障委員会ではこのような話を突っ込んでしていた。食べものの危機を考えるセミナーは身近なテーマで、多くの人と考えていこうとしていた。食料安全保障研究会の内容はウェブサイトで発信したり、『アフリカNOW』で特集したりしたけど、もう少し突っ込んで、先ほどの視点からどうなのか、検討するのはこれからの課題だよ。

会員減少の危機、会員とのつながりと交流

— 会員の皆さんとどのように関係を築かれてきましたか。

今でも数字ははっきり覚えているけど、事務局長になったときに会員が283名いた。ところが4年で198人に減ってしまった。当時のAJFの活動はネットワーク活動の裏方で、表立って「会員になって」と勧誘できる状態ではなかった。会員減少は会費・寄付の収入減少に直結し、AJFの財政も非常に厳しい状態だった。対応に苦慮していたところ、会員ではないけれど中小企業コンサルタントが協力してくれることになり、課題検討会を行った。その時コンサルの人から、「AJFの強みは何だ」と問われて、突き詰めて「人脈」だということになった。僕の介助者仲間の東大の教員を通して岩波書店に働きかけ、林さんのブックレット『エイズとの闘い 世界を変えた人々の声』を出版したり、個別につながりのある人に積極的に入会を働きかけたり。稲場さんはNGO研究会で関わり合った人たちに働きかけ、50名を超える入会があった。それぞれの働きかけがあって2004年度末までに会員数は約270人に増えた。そばでAJFの活動を見ていてくれた人が入ってくれた。

会費を担保するのが会報。送るときに、払込用紙を同封して会費納入のお願いと、「この記事はぜひ読んでくださいね、今どういうことをしていらっしゃいま

すか」と書き添えると会費が入って、今こんなことやっているよって言ってくれる。その積み重ね。会員の力を活かすために会員とのホットライン用アドレスを作った。会員からの情報をキャッチするしかけだよ。それから会員に会うためにアフリカ学会に入って、毎回行っていた。学会の会場で僕の顔を見ると、会費を払おうと財布を出してくれる人もいたし、今度、入会手続きするからと声をかけてくれる人もいた。また、ちょっと違った視点から質問をしていたので、他の人がおもしろがってAJFの活動を知った人もいたようだ。戸田真紀子さんはアフリカ学会であいさつを交わす程度だったが、スティーブン・ルイス（Stephen Lewis）の『Race Against Time: Searching for Hope in AIDS-Ravaged Africa』の書評を書いてと依頼した。そしたら戸田さんはこの本を気に入ってくれて、大学のゼミの教材にして何度も読んでくれているそう。押しかけて書いてもらったうえに会員になってもらった（笑）。押しかけ原稿依頼は結構やっている。

『アフリカNOW』はツールとして役に立つ。読み手がこういう人なんだよって言えるからね。研究者も国際開発のことをやっている人もいて言えば書いてくれる。アフリカ研究は発表の機会が限られていることもあるから、若手研究者も喜んで書いてくれたりしていた。

あと多少なりとも本を読んでいないと話のねたがないから、よく読んできた。集中できるときは1日に2冊。600ページぐらいの本を2冊読む。読むのは早いほうかもしれない。老眼もまだ大丈夫。最近はおっぱら図書館で借りて読んでいる。今、熊野純彦の著書を読んでいる、とてもおもしろい。

インターンなど若手に本を読んでもらって、著者にインタビューして、『アフリカNOW』に寄稿するとか、本を通して理解や人のつながりをひろげるのもAJFにとって大事なことだと思う。

会員はAJFの力の源泉。会員データベースにメモを書いておいて、メールも残っていて、この人はこうい



AJF20周年企画「斉藤事務局長が語る。アフリカと世界と自分がつながる仕組み」 2015年3月21日 東京大学駒場校舎

うことに関心がある、とわかるようにしている。記録はそういう風に使う。会員の出番はいろいろある。会員の集いに出てもらおうとか、『アフリカ NOW』に書いてもらおうとか、そこまでいかないなら写真の紹介とかでも。この前の会員の集いはよかったね。ジンバブウェ

のショナ彫刻の話を宮園さんにしてもらうことができた (p. 20 参照)。

今後の事務局に期待することは、会報をちゃんと出すこと、そして、会員の力を活かしてほしい。

2020年10月30日 AJF 事務局にて

AJF 活動史 1993年～2019年

1993年

- ・アフリカンシンポジウム「アフリカは今～地域自立に立ち上がる人々」開催
- ・TICAD I (第1回アフリカ開発会議) (東京) の会場で「市民提言書」を渡す

1994年

- ・アフリカシンポジウム実行委員会が母体になり、AJF が発足

1995年

- ・シンポジウム「沙漠化に取り組む～危機から立ち上がる人々」開催

1996年

- ・セミナー & ツアー「女性が変わるアフリカと日本」開催
- ・セミナー & ツアー「食と環境～アフリカと日本の持続可能な地域発展を目指して」開催

1997年

- ・「アフリカの環境保全におけるネットワーク調査」開催

1998年

- ・TICAD II 参加とシンポジウム開催

1999年

- ・産直・提携などの研修・交流のためにジンバブウェの NGO スタッフ招へい
- ・セネガル草の根スタディツアー実施

2000年

- ・ワーキンググループ体制開始
- ・AJF ビジョン2000策定

2001年

- ・食料安全保障研究会と感染症研究会の活動開始

2002年

- ・TICAD III 閣僚級会合参加。日本とアフリカの NGO の提言書を発表
- ・ジョハネスバーグ・サミット参加

2003年

- ・TICAD III に向けて ACT2003 発足

2004年

- ・特定非営利活動法人の認証
- ・TICAD 市民社会フォーラム (TCSF) 設立

2005年

- ・シンポジウム「2005年どうする日本 アフリカとの関わり」開催

2006年

- ・アフリカンキッズクラブ活動開始
- ・国際シンポジウム「HIV/ エイズ新規予防・医療技術開発の重要性～地球規模の取り組みのために」開催
- ・アフリカ紛争問題タスクグループの活動開始

2007年

- ・NGO データベース公開
- ・外務省 NGO 研究会『保健分野における国際機関との連携』発行

2008年

- ・『アフリカの食料安全保障を考える』発行
- ・TICAD IV、洞爺湖サミットへの取り組み

- ・連続セミナー「食料価格高騰がアフリカ諸国に及ぼす影響」開始
- ・スタンドアップ 2008実施

2009年

- ・MDGs 達成をめざし「動く→動かす」始動
- ・連続セミナー「飢餓を考えるヒント」開始 (2012年まで)

2010年

- ・在日アフリカ人のエイズ対策事業実施
- ・アフリカ市民社会評議会 (CCfA) の新体制確立を支援

2011年

- ・外務省 NGO 研究会「保健関連 MDGs 達成に向けた NGO の役割：人間の安全保障とコミュニティ・エンパワーメント」実施

2012年

- ・TICAD V に向けた NGO コンタクト・グループの活動
- ・アフリカ熱帯林の現状と日本との関係の事業開始

2013年

- ・TICAD V への政策提言活動実施
- ・エイズ対策研究事業実施
- ・連続セミナー「食べものの危機を考える」開始 ((2015年まで)

2014年

- ・ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) をテーマに NGO 研究会 実施
- ・コンゴ共和国絶滅危惧種マルミミゾウ調査事業実施

2015年

- ・シンポジウム「新たな国際目標 (2030アジェンダ) とエイズ・結核・マラリア～日本から考える三大感染症の今後」開催
- ・連続セミナー「アフリカの魅力を知る」開催 (全4回)

2016年

- ・TICAD VI 市民社会報告シンポジウム「日本とアフリカの新たな歴史の始まり～TICAD VI を超えて」開催
- ・「MDGs から SDGs へ：変化する市民社会の取り組み」共催

2017年

- ・共催セミナー「ケニアの現場からみた SDGs」開催
- ・連続セミナー「アフリカ健康フォーラム」を東京女子医科大学と共に開始 (2019年までに5回開催)
- ・TICAD 閣僚級会合参加
- ・UHC フォーラム2017に参加

2018年

- ・「アフリカの今～1年後の TICAD に向けて」(主催: Afri-Can)
- ・「生物多様性保全を考える集い」開催
- ・TICAD 閣僚会合 (横浜)。サイドイベント実施。提言書を発表
- ・「エイズ・結核・マラリアの終息に向けた新たな取り組み～グローバルファンドと市民社会の対話」共催
- ・モザンビーク・ブラジル・日本3カ国民衆会議参加

2019年

- ・「TICAD タウンミーティング」(主催: Afri-Can)
- ・西サハラセミナー開催
- ・TICAD 7 (横浜)。サイドイベント開催
- ・在日アフリカ人と共に生きる勉強会・交流会第1回 (全4回) 開催

AJF25周年

これからアフリカの人々とできること アフリカ日本協議会の歴史を振り返りながら

What can we do with African people ?

Consideration on AJF's activities for 1994-2019

本稿は、2020年2月8日に開催された AJF25周年記念特別企画「これからアフリカの人々とできること～アフリカ日本協議会の歴史を振り返りながら」での発言をまとめたものです。この企画の第1部では、AJF が多様な活動を通じてこれまで何を目指してきたのかについて報告が、第2部では、これからアフリカの人々と何をしていくのか、どのような課題があるのかについて提起がされました。なお、誌面の都合で今回掲載できなかった他のスピーカーの発言などは、次号の『アフリカ NOW』に掲載する予定です。また、発言者の AJF の肩書きは、この企画が開催された時点のものです。

AJF の活動を振り返る I 1994-1999年

宮道 一千代／みやみち かずちよ：AJF 理事

尾関 葉子／おぜき ようこ：AJF 初代事務局長

吉田 昌夫／よしだ まさお：AJF 初代代表

AJF 設立の経緯

宮道：AJF の発足は1994年ですが、その1年前、1993年の「アフリカシンポジウム」から2000年までを振り返りたい。まずは設立の経緯について話してください。

吉田：初めての東京アフリカ開発会議（当時の名称。TICAD I）が外務省のイニシアチブで始まったときに、特に当時の日本国際ボランティアセンター（JVC）の方々から、政府間だけではアフリカの開発の問題は語りつくせない、市民間の関係をよくしていくということではなければアフリカと日本の関係はうまく結びつかない、という声があり、活動を開始した。アフリカの市民団体を招へいし、国際会議「アフリカシンポジウム」を開催した。そのシンポジウムで私が基調講演をしたことで、AJF の代表を務めることになった。私はアジア経済研究所と中部大学でアフリカと日本の関係について考えることが多く、その経験が話すことになった。日本ではエチオピアの飢餓の問題などがとりあげられるようになっていたが、まだアフリカは遠い話だった。日本の人の目のなかにアフリカの地図も国の名前も入っていない。学者でもそうだった。アフリカをもっと私たちの頭のなかに入れて、問題点などを話し合う場所を作ってほしいということを言うように思う。

尾関：今日の会場に来る途中に曙橋駅があり、AJF の設立シンポジウムを当時、曙橋にあったアジア経済研究所で開催したことを思い出した。TICAD I 直前の「アフリカンシンポジウム」を開催したのは早稲田大学の国際会議場で、研究者の方々にもたくさん協力していただいた。当時は、今日のように国際協力機構（JICA）の施設を使うことは考えられず、その発想すらなかった。時代は変化したと感じている。

1993年の3月、TICAD I 開催の政府発表を新聞で知った後、JVC のアフリカに関係している人々やボランティアチームの間で、何かしようという話が出たのが始まりだった。前年にカンボジア復興閣僚会議があり、市民がシンポジウムを行ったのを参考にした。具体的には当時 JVC で企画調整を行っていた柴田久史さんのアイデアが進んだ。私たちが一番強調したかったのは、アフリカの人の口からアフリカの話をしようということだった。当時は、シンポジウムのチラシにあった「地域自立に立ち上がる人々」という文字を見た外務省の人が指ではたいて、「こんな人いるの？」と言われるような状態だった。とにかくシンポジウムだけはやろう、と机を1つ、スタッフ1人、JVC に96万円の借金をして始まった。設立からの6年間は、「アフリカシンポジウム」で語られた課題にそって活動した。そうした課題が世の中の流れだったというだけでなく、アフリカが常に抱えている課題だったと思う。ネットワークとアドボカシーを主な活動とするなかで、いろんな人にアフリカを知ってもらうことも広い意味でのアドボカシーと考え、やれることはなんでもやろうとした6年間だった。

宮道：ほぼ毎年、国際会議を企画し、アフリカからスピーカーを呼び、国内ではスピーカーツアーをして地方の会員とつながるきっかけになった。

アフリカ日本協議会（Africa Japan Forum） という団体名になったわけ

尾関：「日本アフリカ協議会」という名前も候補にあったが、日本のなかのアフリカにかかわる人たちの場だけではない、という意識が強くあった。モデルだったのは、カナダの Partnership Africa Canada（PAC）という団体で、カナダとアフリカが一緒に考える、アフリカの問題はアフリカファーストであるという姿勢に感銘を受けていた。最初に決まったのは Africa Japan Forum という英語名だった。

宮道：協議会というと普通は council を想像するが…。

尾関：フォーラムは、「場」という意味。政策提言で始まった活動だったが、もっと多様な活動があると考えていた。日本のなかでアフリカと直接かかわる場が少なかったこともある。アフリカにいるアフリカの人々の動きとつながる、そういう場をつくらうということが目標だったのでフォーラムという名前がしっくりきたのだと思う。政策提言を直接行うための協議体というだけでなく、いろいろな形で集う人が自らの行動と責任で活動を起こしていく場が念頭にあった。裏話だが、当時、市民フォーラム 2001 が、前年度にはカンボジア市民フォーラムが設立されており、「フォーラム」と名の付く団体がすでにあったことも、日本語でフォーラムにしなかった理由。政策提言をする団体です、政府と向かって話をしますよという意気込みを伝えるためにも、訳としては間違っているかもしれないが「協議会」にした。

当時のアドボカシーとしての活動とは

宮道：私たちが1993年にアフリカのゲストから突き付けられたのは、アフリカの人々が自分たちの開発に参加できるように日本で何ができるかを考えてほしい、という課題だった。

吉田：アドボカシーというのは簡単なようで難しい。アフリカの人々が自分たちで決定すべきことを、援助をする側が考えた方針でこれがいいいでしょう、と押しつけがましく計画を進めるのではない。アフリカの人たちを主にして、その意見を聞いて協議することが大事だと考えて活動してきた。また、2000年を機に債務帳消しが大きな課題となっていたが、日本政府はやる気がなかった。名古屋でグループをつくって意見交換や勉強会を開催し、なぜ債務が起きたのかということを理解していった。福岡のジュビリー九州という NGO とともに市役所に押しかけて、福岡市として日本政府

に働きかける声明を出すよう要請したこともある。

宮道：TICAD II 以降について触れておきたい。1998年の TICAD II が活動のひとつの目標だったため、その後の活動について迷いもあり、活動の方向性を考える場として、「ビジョン99」、「ビジョン2000」という会議を行った。そのなかで生まれたのがワーキンググループ制だった。例えばその一つ、交流の場ワーキンググループは、月に1回、第3土曜日にクスクスというアフリカレストランでアフリカの話をする会を開催していた。7つのワーキンググループが活動しながら、2000年以降の第二期へと進むことになった。

AJF の活動を振り返る II 2000年代以降

稲場 雅紀／いなば まさき：AJF 国際保健部門ディレクター（※ 1）

斉藤 龍一郎／さいとう りょういちろう：AJF 第2代事務局長・理事

林 達雄／はやしたつお：AJF 第2代代表・特別顧問

玉井 隆／たまいたかし：AJF 理事（※ 2）

茂住 衛／もずみ まもる：AJF 理事

津山 直子／つやま なおこ：AJF 代表理事（※ 3）

山邊 寿美子／やまのべすみこ：AJF 理事

稲場：1990年代と2000年代の AJF の活動は異なっているが、考え方は共通している。2001年以降は、感染症研究会と食料安全保障委員会の2つの研究会を軸にして政策提言活動（アドボカシー）を行なってきた。この活動について、斉藤さんと林さんから話してください。

斉藤：2000年当時はアフリカのエイズ危機が大きな焦点になっていた。林達雄さんが2000年に南アフリカ・ダーバンで開催された国際エイズ会議に参加したときに、会場の外で「われわれに治療を」「われわれを生き延びさせろ」と訴える HIV 陽性当事者の運動に出会った。生き延びようとする人々の声に応えるために、AJF のエイズ危機に対する取り組みが始まった。2002年に世界エイズ・結核・マラリア対策基金（世界基金、GFATM）が発足して、エイズ治療に資金を拠出しようという画期的な動きが始まり、AJF もこの動向に応じた政策提言活動を行なってきた。援助する側の都合ではなく、当事者の声に応えるための活動を追求することの重要性は、これから AJF に関わる人たちにもぜひ伝えていかなくてはならない。

林：この当時の運動を通じて、エイズは「死を待たざ

（※ 1）現在は AJF 理事も兼任

（※ 2）現在は AJF 共同代表

（※ 3）現在は AJF 共同代表

るをえない病気」から「治療によって生き延びる病気」へと大きく変わっていった。この転換を推進したのが、南アフリカなどのHIV陽性者の運動であり、それを応援する国際社会の動向であった。エイズのようなグローバルな課題に対する国際社会の動向に、当時の日本の国際協力団体は遅れをとっていたと思う。「すべての人にいますぐ健康を！（Health for All NOW!）」の運動を国際的に牽引してきたデビット・サンダース（David Sanders）さんからの「日本の1億2千万の人の意識を変えてくれ」という声に応えて、2000年代には「ほっとけない世界の貧しさ」というキャンペーンを通じて、世界の貧困を解消する活動を応援する意思を表すためのツールとして、460万本のホワイトバンドを売ることができた。

稲場：政策提言をグローバルキャンペーンに結びつけていく活動は、その後のSDGs市民社会ネットワークにもつながっている。AJF発足の契機になったTICADについても、「当事者の声を政策へ」という理念に基いて、2000年以降も取り組んできた。玉井さんから、2003年に横浜で開催されたTICAD Vの取り組みの経験について話してください。

玉井：TICADに対して「TICADの場にアフリカの市民社会がちゃんと存在する」、そして「TICADのプロセスを監視し意見する」ことを原則にして取り組んだ。しかし現実には、TICADの場において「アフリカの市民社会が存在する」こと自体が困難であった。アフリカ市民社会の代表が日本に来ることの困難さだけでなく、外務省の担当者にこの原則が共有されていないために、協議の場では毎回のように、このことの重要性を訴えなくてはならなかった。そして「TICADのプロセスを監視し意見する」という点で、市民社会が一枚岩になることはとても難しい。アフリカのNGOの中には、自国政府に立場に近い人もいれば、政府に批判的で「TICADなんかつぶしてしまえ」と主張する人もいる。こうした多様な意見をまとめて、市民社会として提言書を提起するために、AJFは力を尽くしてきた。

稲場：アフリカ理解を促進するための活動について、茂住さんと斉藤さんから話してください。

茂住：2000年頃のAJFの活動は、主にワーキンググループによって担われていた。ワーキンググループの活動は、アフリカ理解の促進と同時にAJFの入り口を広げることも目的としていた。2005年からは、「多様なアフリカを伝える」こと目的としてアフリカひろばを開催。会場を借りたセミナーだけでなく、アフリカンショップを訪問したり、高尾山の登山と講演を組み合わせた企画も実施した。アフリカひろばでは、運営に

関わる誰もが「オーナーシップを持って、かつ、楽しむ」ことを実行してきた。2000年代の日本では、アフリカに関わるNGOが増え、在日アフリカンやアフリカンファミリーも急増していたが、この状況がアフリカひろばの活動も支えていたと言えるだろう。

斉藤：『アフリカNOW』では「アフリカの障害者」や「アフリカ子ども学」についての特集も組んだ。障害者や子どもたちが自らの力で将来を切り開いていくために、これらの課題についての問いを投げかけ、何ができるのかを一緒に考えていくための問題提起を行った。

稲場：2000年以降のAJFの活動の柱のひとつであるアフリカンルーツの人々との協力・連携のための活動について、津山さんから話してください。

津山：2006年からアフリカンキッズクラブの活動が始まった。アフリカにルーツを持つ子どもたちが集まり、アフリカの文化に触れ、一緒に楽しみ、自尊心を高めてほしいと活動してきた。さらに、在日アフリカ人家族の生活を考える会をつくって、家族の体験や直面している問題、有益な情報など話し合い、交流を深めた。AJF会員のキッズのママたちが活動の中心を担い、会員参加型の取り組みとしても意義があった。アフリカンキッズクラブは、近年ではアフロビーツダンスのクラスも開催し、アフリカンキッズクラブ東海が結成されたり、在日アフリカ人の団体との連携などの広がりもできている。また、ユース世代の活動として、ミックスルーツ（ハーフ）の若者が中心になり、African Youth Meetupが昨年からはまり、経験や思いを共有するイベントや、SNSやオンラインメディアでの発信などを行っている。

稲場：AJFは、環境問題についても1990年代から取り組んできたが、最近ではアフリカの熱帯林と野生生物保全のための活動も実施している。この活動について、山邊さんから話してください。

山邊：AJFでは2012年から、アフリカ熱帯林と日本の関係の現状について、セミナーやウェブサイトを通じて情報を発信してきた。さらに、コンゴ共和国の野生生物保全の専門家を招へいしてトークイベントを開催したり、ヨウムの保全活動の資金を確保するためのクラウドファンディング、気候変動に関する映画の各地での上映会、アフリカ熱帯林の課題についてのワークショップなどの活動も行なっている。アフリカ中央部の熱帯林には、違法伐採や密猟などのさまざまな問題があるが、日本国内ではこれらに関する情報はあまり見受けられない。アフリカ熱帯林の現状は、日本の消費生活にも深く関わるグローバルな課題であり、これからもAJFの活動として取り組んでいきたい。